

川越の絵画と建築を楽しむ！

●浦高会でバス小旅行「川越の旅」！

昨日7日(日)は、週末の天気予報では「爆弾低気圧」の影響で暴風雨とのことでした。2月から企画していた旅行なので開催の可否を思案したのですが、金曜日の朝に役所内の防災対策課に確認したところ、「朝には雨も上がり、風が多少残るかも知れないが天気になる」との情報を得て、幹事の私は開催を決定しました。でも、内心は朝までドキドキでした。

朝7時30分、春日部駅東口にバスが到着。春日部地区浦高会の会員の皆さんが16人とお子さん1人が次々と集まって来ました。8時、久喜駅に向かって出発です。

8時40分、久喜駅東口で久喜麗和会の会員の皆さん10人を乗せて再スタート。更に9時30分、JR川越線の西大宮駅で4人の方々を乗せ、最初の訪問地である



「ヤオコー川越美術館 三栖右嗣記念館」に向かいました。9時55分、美術館【写真①】に到着しました。

*

◆ごあいさつ

ヤオコー川越美術館館長 川野幸夫さん【写真②】
皆様のあたたかいご支援のおかげもあって、この度ヤオコー川越美術館（三栖右嗣記念館）を開設することになりました。

私達の母であり、株式会社ヤオコーの実質上の創業者であります故川野トモ名誉会長が30年近く前、三栖先生の個展で20号のコスモスの絵を求めて来ました。絵画に特別な関心を持っていたとは思えない母でしたから、その絵によるほど心を動かされたのだと思います。以来、母をはじめ、私達家族が三栖先生と親しくお付き合いをさせていただくようになりました。

三栖先生は、日本洋画壇を代表する、知る人ぞ知る優れた画家です。昭和57年に埼玉県比企郡玉川村（現ときがわ町）に移り住まれ、創作活動を続けられました。そのアトリエは、私どもヤオコーの創業の地である小川町にも近く、何かとご縁があったのかと思います。



私も三栖先生の作品の魅力に惹かれて、一作一作と分けていただくようになりました。まずは自宅に飾って、子供達が本物と接する機会を作りました。その後、川越の本社屋完成を機に各階に先生の絵を展示しました。私達社員が日頃から本物を見ることで、時には自らのあり方を省み、本物になる努力をしようという意味を込めたつもりです。

今回の美術館は、ヤオコーの創業120周年事業として実現しました。私が長年温めて来た計画でしたが、地域の皆様の豊かな日常生活に貢献することを存在理由としているヤオコーにふさわしい記念事業であると考えています。また建物の建設にあたっては、日本を代表する建築家の伊東豊雄先生に設計をお願いすることが出来ました。たまたまのご縁でしたが、当社の運の良さです。伊東先生には候補地の選定の段階から熱心に取り組んでいただきました。とても素晴らしい施設が完成したと喜んでいますが、すでにくつろぎの建設雑誌に取り上げられ、紹介されています。三栖先生の作品を見学にこられる方だけでなく、建物を見学に来られる方も沢山おられるのではないかと思います。

この美術館の完成にあたっては、川合川越市長を始め、多くの方々のご協力をいただきました。スーパーマーケット企業のヤオコーが運営する施設にふさわしい、温かく真心のこもったおもてなしの出来る美術館にしたいと念じています。この美術館が、小江戸川越の新たな名所として長く愛されるものになるよう努力して行きます。

皆様にはお気軽にご来館いただき、お楽しみいただけましたら幸いです。【美術館ホームページより】

*

今回の企画は、浦高同窓会の会長である川野幸夫さんが造られた美術館を見学して三栖さんの



絵画を楽しみ、川越の歴史と文化を満喫し、さらに久喜と春日部の地域同窓会の交流を広げようというものでした。エントランスホール【写真③】に入るとマネージャーの宇多村忠夫さん【写真④】が迎えてくれました。





そして圧巻は三栖さんの代表作の一つ500号の「爛漫」【写真上⑤】です。新河岸川の桜は既に散ってしまっていました、この絵で満喫です。



続いて、今回の旅のご案内をお引き受けいただきました西部浦高会副会長の西澤 堅さんのご挨拶でした【写真⑥：左側が西澤さん】。

◆ 三栖右嗣さん略歴 ◆



1927（昭和 2 年）神奈川県に生まれる。

1952（昭和 27 年）東京藝術大学（安井教室）卒業。

1972（昭和 47 年）アメリカにアンドリュー・ワイエスを訪ねる。銀座・飯田画廊にて昭和 51 年（1976）まで毎年個展。

1975（昭和 50 年）沖縄海洋博覧会「海を描く現代絵画コンクール展」に『海の家族』を出品、大賞受賞。沖縄県立博物館蔵。「大賞受賞記念 三栖右嗣展」〈読売新聞社主催〉〈新宿伊勢丹〉

1976（昭和 51 年）第 19 回安井賞展に『老いる』を出品。安井賞受賞。東京国立近代美術館蔵。皇太子殿下（現：天皇陛下）依頼により『沖縄の海』を制作。東宮御所蔵。

1977（昭和 52 年）国立公園協会の依頼により『小笠原・父島より南島・母島を望む』を制作。同協会蔵。個展〈上野松坂屋〉。

1979（昭和 54 年）クライスラー画像〈ス페이

ン・マドリード〉にて個展。個展〈上野松坂屋、松坂屋本店（名古屋）〉。「第 1 回日本秀作美術展」〈読売新聞社主催〉に『午後の陽ざし』を出品。

「現代日本絵画展」〈北京・上海〉に『老いる』を出品、訪中。1981（昭和 56 年）石版画集『林檎のある風景』を刊行。大版画『林檎のある風景』を制作。

1982（昭和 57 年）東京セントラルアネックスにて「三栖右嗣展」。個展 松坂屋本店（名古屋）。牧 進と「日本四季展」。

1983（昭和 58 年）毎日新聞社よりカラーリトグラフ四曲一双屏風『紅梅図』刊行。「日本秀作美術展」〈読売新聞社主催〉に『富良野風景』を出品。

1985（昭和 60 年）「昨日・今日・そして明日・三栖右嗣展」〈伊勢丹美術館・新潟伊勢丹〉。

1986（昭和 61 年）個展 〈松坂屋本店（名古屋）〉。

1988（昭和 63 年）現代作家デザインシリーズ「三栖右嗣展」〈朝日新聞社主催〉。

1990（平成 2 年）「花のある名作美術展」に『ナガールの花束』出品〈NHK サービスセンター主催〉。

1991（平成 3 年）個展〈日本橋三越・大阪三越・札幌三越〉。

1993（平成 5 年）緞帳『爛熳』を制作〈和光市文化センター〉。

1994（平成 6 年）緞帳『薫風』を制作〈玉川村文化センター〉。

1995（平成 7 年）個展〈松坂屋本店（名古屋）〉。

1996（平成 8 年）『爛熳』500 号を制作〈（株）ヤオコー本社〉。リトグラフの 2 世紀記念展に招待出品〈フランス〉。

2010（平成 22 年）4 月 逝去 享年 82 歳。

2012（平成 24 年）「ヤオコー川越美術館 三栖右嗣記念館」開館。【美術館ホームページより】

＊

右の作品は1976年に第19回安井賞を受賞した作品の習作「老いる」【写真⑦】で、「他人にとっては汚いシワにしか見えなだろうが、私にとっては、一つ一つのシワが私が苦勞をかけた想いつながっている。シワの一筋一筋が私自身なのだ。」と語られています。



(「野の讃歌 三栖右嗣展」カタログより抜粋)

後に「老いた母を写生している間中、涙が止まらなかった。」とも語っています。自身の母親をモデルとしたこの作品で、三栖右嗣は「老いゆくいのち」に真正面から向き合ったそうです。【写真と文は美術館ホームページより】

この展示室1の「老いる(習作)」「生きる」をコーナーは強烈な印象が残りました。「雪の消える頃」「冬野」「林檎」なども、枯れゆく中に強く生き残ろうとする生命が感じられました。

絵画を楽しませていただいたあとは、ヤオコー自慢の“おはぎ”です【写真⑧】。甘



さがちょうど良い美味しさでした。感謝！
続いて建築です。

＊

◆ 建築概要 ◆

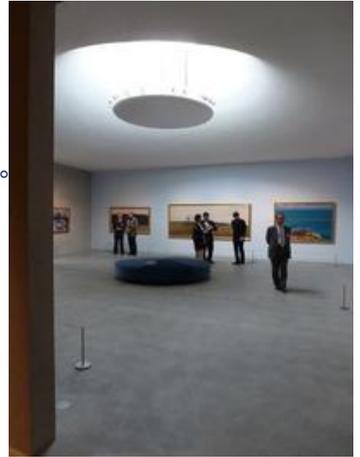
ヤオコー川越美術館(三栖右嗣記念館)は、洋画家：故三栖右嗣氏の作品を展示する美術館として、2つの展示室、エントランス、カフェと休憩を兼ねたラウンジ、の4つの空間で構成されています。ともに約10m角の約100m²の部屋でありながら、その屋根形状、素材の違いからもたらされる室内での光の明暗、および表情が各部屋で異なり、当建物を1周巡ることで、それぞれ特徴的な光の表情を楽しむことのできる空間となっています。



特に2つの展示室では、凹凸の屋根形状からもたらされる光の明暗や表情が、

展示される絵画とともに、三栖氏の作品に表現される、溢れる生命力の輝きを体感する空間を作り出しています。外は、建物を緑と池が囲み、その中を自由に散策を楽しむことができます。

古きよき小江戸川越の街とともに、また春には近くを流れる新河



岸川沿いの桜並木とともに、気軽に立ち寄れることのできる、公園のような美術館になっています。

【伊東豊雄建築設計事務所】【写真⑨⑩は「ギャラリー ときの忘れもの」より】

＊ ＊

◆ 伊藤豊雄 ◆



1941年(昭和16年)京城市(現ソウル市)生まれ。父親の郷里である長野県下諏訪町で育つ
1965年(昭和40年)東京大学工学部建築学科卒業
1971年(昭和46年)(株)アーバンロボット設立
1979年(昭和54年)(株)

伊東豊雄建築設計事務所に改称

＊

この美術館のことをもっと書きたかったのですが、実はここでカメラを落としてしまい、気が落ち込んでしまい、なかなか



メモ帳に向かうことができませんでした。そこで、美術館のブログ4月5日から新河岸川の桜もご紹介して終わらしましょう。